ゼミ論集に寄せて

本論集は，京都大学経済学部黒澤ゼミ第 8 期生（2011〔平成 23〕年度の参加者。入ゼミ年度を問わない）の学習・研究成果の一部であり，第一部にゼミ論文（個別レポート）を，また第二部にはディベート大会への参加記録を収録しています。

黒澤ゼミでは，過去数年は，ヨーロッパの経済社会を中心的な主題として基礎文献の輪読を行って来ましたが，今年は主題を産業論の国際比較分析に変えて実施し，これと並行する形で，各参加者による個別報告を行いました。一昨年に創刊号の刊行に漕ぎ着け，本号は通算第三号となります。ゼミナールでの学習の成果をこのような形で纏め，ゼミ論集として公表できることを，担当教員として大変嬉しく思います。

2011（平成 23）年度）のゼミナールでの共同学習は，前期においては，湯沢威・鈴木恒夫・橘川武郎・佐々木聡編『国際競争力の経営史』と，橘川武郎・塩見治人編『日米企業のグローバル競争戦略』の輪読によって行いました。多くの産業を対象に，産業論，産業史，経営学的見地に基づく分析を，国際比較の視座で分析することになり，各産業が固有に持つ商品・技術・市場特性を踏まえて，濃密な議論を行うことができたように思います。多くの著者による多様な分析を読み込むことになったため，単調さに陥ることなく輪読を進めることができ，その分，ゼミも活発になったように思われます。例年反省点に挙げているアカデミック・ライティング教育の体系性改善という課題については，やはり今年も十分ではありませんでした。とはいえ，「競争力の視点からみた産業分析」というゆるやかな大枠の中で，自分の問題関心を問い直して自ら社会科学的な問いを設定し，論証のための論理と材料を揃え，研究報告を準備し，さらに討論を経て新たな発見を得るというプロセスで学んだことも，少なくなかろうと思います。

本論集の第一部には，5 人のゼミ生の個別研究の成果がまとめられています。今年度からゼミに加わった青木真咲さん（5 回生）は，イギリス滞在で経験した異文化体験についての自己分析に加え，東日本大震災に際して行った自らのボランティア活動についても寄稿してくれました。戦後日本が体験した最も大きな自然災害に直面した一人の若者が，自分自身でできることを問い，行動に移したことの記録です。自然の猛威と，未曾有の原子力災害に日本と世界が衝撃を受け，その中で人々が新たに「絆」をみいだした 2011 年度（震災自体は年度初め直前の 3 月 11 日でしたが）という「時」を象徴する作品といえましょう。

残る論文は，いずれも，各人が個別研究テーマとして主体的に行った学習・研究の成果をまとめたものです。伊藤智康さん（2 回生）は，経営破綻を経て再建の途上にある日本航空を中心に，日本の航空業界の問題を検討しています。卒業生である中越雅也さん（4 回生）は，就職先でもある保険業界について，法人形態や国際化戦略などの問題を焦点に，分析をおこなっています。橋本優さん（3 回生）は，当初は経済・市場の中の文化財の位置を研究テーマとしていましたが，その後方向性を変えて，カール・ポランニンーの分析を手がかりに，「アリストテレスによる経

済の発見」というユニークなテーマで個別研究を寄稿してくれました。他方，文野聡也さん（3回生）の報告は，産業論という全体テーマに沿って，経営史・産業史的で，かつ産業論的でもある考察を，サントリーを中心に行ったものです。

国外への交換留学中で，本論集には寄稿できなかったゼミ生にも触れておきたいと思います。田窪裕美子さん（3回生）は，イタリア政府の留学制度を利用し，イタリアに渡航し学んでいます。また石田真大さん（2回生）は，前期には鋭い観点での発言でゼミの議論に貢献していましたが，後期には，今年度から公募方式で選抜が行われるようになった学部間協定校であるゲーテ大学経済・経営学部（ドイツ／フランクフルト）にて，留学生活を送っています。また同大学には，金谷竜太郎さん（２回生）も，年度終わりの４月から渡航予定です。グローバル化が急激に進行しているにもかかわらず，日本人学生が「内向き」であることが社会的に問題視されていますが，ゼミ生から多数の留学者・留学内定者を出せたことを嬉しく思います。

金谷さんと，有尾琢磨さん（3回生）は，個別研究の本論集への掲載は見送りましたが，ゼミではそれぞれ個別報告を行い，また他のゼミ生の発表に対しても毎回積極的な発言をおこなって，議論に貢献してくれました。

中越さんは，昨年に引き続き，皆に気を配りながら然るべきタイミングでリーダーシップを発揮してくれました。また橋本さんも，幹事役として，めんどうな仕事を切り盛りしてくれました。最後になりますが，研究生として中国出身の王琳琳さんが毎回参加し，ゼミに国際色を添えてくれました。

第二部に概要が掲載されているディベート大会は，関西学院大学の藤井和夫先生のお誘いを契機に，2008年度（平成20年度）に第１回を行ったもので，今年は４回目となります。今年は，教員側の都合により，今年は京都大学の２ゼミ（黒澤ゼミ，今久保ゼミ）対関西学院大学の藤井ゼミの２チームの対戦となりました。今年は，学内外の用務の異例の輻輳で，教員はディベート大会の準備にはほとんど口を挟むことなく，純粋に学生の主体性と判断で準備を進め，本番に臨むことになりました。他大学のゼミナールとの対抗戦・交流は，刺激に富むプロジェクトであったようで，教員抜きでもなんら支障なく熱心かつ周到に準備を進め，期待した通りの結果（4年連続の勝利）を出すことができました。ディベートは論理力と表現力を鍛える場でもありますが，新卒一括採用という，関西学院大学側が提示した主題に載りながらも，自主的に広く学習をおこなったことで，多くのことが学べたと思います。今後もこの企画を続けてゆければと考えています。

最後となりましたが，本論集の面倒な編集作業を引き受けてくれた伊藤さんに，心から御礼を申し上げます。

経済学部教授　黒澤隆文

【付記】本論文集は，2011年度京都大学経済学部学生学習研究支援経費により刊行されました。